

愛知県紙に見る書籍流通史の一こま

鈴木俊幸・原田和佳

はじめに

本稿は、明治十八年（一八八五）から二十一年（一八八八）を中心とした愛知県紙掲載の広告を主な資料として、同県におけるこの期間の書籍流通について考察したものである。調査が叶ったのは、鈴木架蔵の原紙、国立国会図書館・豊橋市立図書館・愛知県図書館・名古屋市鶴舞中央図書館所蔵マイクロフィルムで、次の各紙である。

- ・名古屋絵入新聞（明治十七年一月～十八年十二月）
- ・東海新聞（明治十八年一月～十二月）
- ・黄金新聞（明治十八年三月～十九年一月）
- ・愛知日報（明治十八年三月）
- ・扶桑新報（明治十九年一月～二十年二月）
- ・絵入扶桑新報（明治十九年一月～二十年三月）
- ・金城新報（明治十九年三月～二十一年二月）

- ・絵入黄金新聞（明治十九年四月～七月）
- ・扶桑絵入新聞（明治二十年四月～七月）
- ・金城たよ里（明治二十年四月～九月）
- ・愛知絵入新聞（明治二十年八月～二十一年六月）
- ・新愛知（明治二十一年七月～十二月、改題紙「名古屋」を含む）

各紙、休廃刊や改題等めまぐるしい上に短命に終わったものが多く、それぞれ残り方も万全ではない。各紙における広告の傾向についてまでは言及し難く、また全てひっくり返して時系列に沿った傾向の推移をたどるのも方法的に乱暴で躊躇される。

ただ、この四年間の愛知県紙上に見られる書籍広告の特色は、これまで調査してきた他の地方紙と軌を一にするものも多い一方、際だった特色も少なくない。¹⁾ これらを指摘しつつ、当地におけるこの時期の書籍流通の様態

とその変化をたどってみたい。(鈴木)

一、愛知県紙における書籍安売り広告とその動向

異例に早期の兎屋名古屋支店のものを除けば、後述するように、愛知県紙における安売り広告は、調査の限り、明治十八年九月二十七日『東海新聞』に掲載した石版舎と無慾堂のものが最初である。

愛知県外の書商の安売り広告は、無慾堂のもの以後しばらく確認できず、十九年(一八八六)二月二十三日『扶桑新報』に掲載される東京の永昌堂のものがそれに次ぐ。ここから始まり、大阪信文堂書店、東京松山書店、大阪鶴城堂書房、東京松永博文堂、大阪浪花屋本店、同赤穂書舗、静岡文林堂本店、東京東洋館、同金玉堂、同川崎屋書店等の、他の地方紙でもおなじみの広告が明治十九年をピークに散見、二十年(一八八七)六月三十日『金城新報』掲載の大阪東洋館の広告が確認した限り最後のものである。以上のように、愛知県紙に見られる県外書商の安売り広告はかなり限られており、件数も比較的少ない。また、東京紙や大阪紙も多く流通していたことも考え合わせなくてはならないであろうが、書籍安売りを牽引してきた兎屋・鶴声社・駸々堂の広告が見られない点も特徴として挙げられる。

一方先述した石版舎の広告以後、愛知県内書商の広告は、明治二十一年から『扶桑新報』や『新愛知』に掲載し始める春風舎のものまで約四年間続き、他地域の書商によるものより各段に多い。名古屋については東雲堂・吉良屋兼助・矢田藤兵衛・美濃屋文次郎・衛寿堂・百架堂の広告を確認できる。三河書商の安売り広告は、豊橋の三星堂と春風舎、西尾の三省堂のものを確認できる。(原田)

石版舎の書籍安売り

これまで確認できた愛知県紙に見られる最も早期の書籍安売り広告は、明治十七年(一八八四)七月八日『名古屋絵入新聞』に兎屋名古屋支店が出したものである(引用に際しては適宜句読点を補った。以下同じ)。

過日廣告仕候通り、当支店前支配人津田権平儀不品行ニ付解雇相成、爾来当支店ノ事務一切私取扱候間、不相替御愛顧ノ程奉願候。就テハ身祝ヒノ為メ本店ノ許可ヲ得テ一昨六日ヨ来ル十五日迄十日間、直段非常ニ相働キ差上可申候間、賑々しくご光来奉待上候。以上。

但シ法帖類モ数種相備置申候

名古屋桜ノ町通菅原町三丁目八番地書肆

七月八日

兎屋支店

東京々橋区宗十郎町三番地

近日名古屋へ乗出さんと用意中の書林 無慾堂

名古屋支店は明治十七年一月開業、六月九日『時事新報』に支配人津田権平解雇の広告、翌十日の『名古屋絵入新聞』に、津田に代わって根村熊五郎を支配人に据える旨の広告を載せるが、おそらく同年中には名古屋支店を閉めたものと思われる。

この兎屋名古屋支店の広告に次ぐ安売広告は明治十八年九月二十七日『東海新聞』に同時に掲載された地元石版舎と東京無慾堂のものである。

不景気直シ書籍大安売之広告

来ル九月二十八日ヨリ十月二日迄五日間、別紙当新聞附録書目売直ノ通りニ付、一層賑々敷御来車ノ程奉希上候。敬白。

十八年九月二十七日 名古屋本町二丁目 石版舎

度外大安売の前約束

現今書肆の競争弥甚しく相成候間、弊舗に於ても近日御当地へ出張の上、度外のみまた其度外の大安売を仕候見込にて只今品物用意中、殊に珍しき種類をも多くあつめ可申候まゝ、其期を御楽しみに御待ち被下度。此段前以御約束申上候。以上。

この二つの広告は揃って九月三十日まで四日間にわたって掲載される。無慾堂は、同年八月四日の『朝野新聞』『絵入朝野新聞』『自由灯』等の東京紙に「書林中の先鞭者と賞讃せらるゝ才子兎屋誠氏並に同氏が轍を踏みて近頃安売を始めし正札屋の両家より、弊堂に於ては無慾にも尚一層廉価に書籍を販売せんとす」とうたう開業広告を載せる。翌四日兎屋はこれを排撃せんとする広告を載せ、以後無慾堂の広告は東京紙に載ることはなかった。東京で開店もできずにいたものかと思われるが、翌月に名古屋進出を決意したわけであろう。しかし、愛知県紙における無慾堂の広告もこれきりで、その後は確認できない。名古屋出張販売も果たすことが出来ず諦めたものと思われる。それはなぜであろうか。

また、無慾堂の広告とまったく同時に石版舎の安売り広告が掲載されるのは偶然とは思いたい。無慾堂が名古屋進出を諦めたのも、この石版舎の挙があったからではなかったろうか。石版舎は『東海新聞』売捌所の筆頭であり、無慾堂広告の情報を事前に得た上で、これに對抗し、名古屋進出を抑止すべくここにぶつけたものなのではなからうか。石版舎広告にある「別紙当新聞附録書

目」は未見であるが、無慾堂が進出を諦める一要因となるほどの充実ぶりだったものと思われる。

明治十八年十月十三日『岐阜日日新聞』附録「書籍大
安売広告」が岐阜県歴史資料館棚橋健二家文書に残る
(B30-(3)11)。欄外に「明治十八年十月十三日火曜日
第千二百三拾五号 岐阜日日新聞附録」とある両面印刷
である。冒頭の広告文は次のとおり。

●書籍大安売広告

弊舎ハ本年初春開業以來江湖諸賢士ノ御寵命ニ依テ
倍々盛大ノ域ニ進遷セシハ、実ニ舎員一同欣拝之ヨ
リ大ナルハナシ。然ルニ家屋狹隘ニシテ物品ヲ容
ル、ニ困難ナルヲ以テ更ニ今回当所へ移転シ、其祝
悦ト従来御庇蔭ヲ親フセシ其洪恩ノ報酬ヲ兼ネ、来
ル十五日ヨリ向フ五日間、則チ十九日迄下ニ掲クル
書籍類ヲ非常ノ奮発ヲ以大安売兼売同様ニ、又代価
十錢以上御買上ノ諸君ヘハ石版画ヲ景物トシテ進呈
仕、特ニ当日ヨリ名古屋本舎ヨリモ出張シ御需用ニ
応シ候間、此期ニ乗シ賑々敷御君臨ノ程単ニ奉希望
候。

但シ安売日延ハ不仕候事

明治十八年十月

岐阜笹土居町太田町角

石版舎支店

以下両面に総計三六七点の書目を並べ、末に「名古屋
本町二丁目 石版舎本店／岐阜笹土居町太田町角 石版
舎支店」とする。この初春開業の石版舎岐阜支店の移転
祝いにかこつけた書籍安売りであるが、おそらくは名古
屋での安売りに供したものの残りか、それと同様の方法
で仕入れたものであろう。とすれば、名古屋の安売りは
これに近いものということになる。

書目は「西洋綴最美本」という部立てから始まりその
最初は「南総里見八犬伝四冊」で定価十円のところ現金
売直三円三十銭となっている。これは兎屋明治十八年の
出版物と推定される。これに近い時期の兎屋の広告、明
治十八年九月二日『朝日新聞』所掲「智慧卸売繁昌の祝
ひ売」では三円二十五銭と安売り価格は極めて近い。次
の定価五円の『釈迦八相倭文庫』は辻岡文助版と思しく、
兎屋広告が二円四十銭で石版舎広告は二円六十銭である。
どちらも若干兎屋広告よりは高いが、兎屋広告は安さで
も他を圧倒しているので、比較するほうが酷であろう。
というより、稗史小説をほぼ網羅している以外に「雑書
ノ部」として掲げている実用書・啓蒙書も充実していて
貫禄の書目である上に、兎屋広告が地元紙に掲載されて
いない地域においては、強烈な安さと受け取られたはず
である。

十月二日には「大安売日延広告」を同紙に載せ三日間の期間延長を広告する。十一月一日『名古屋絵入新聞』同三日『黄金新聞』『東海新聞』にも安売広告を掲載する。

再書籍大安売広告

先回不景氣直シノ際非常ノ尊命ヲ親フシ其業半途ニシテ品切等出来シ御望ヲ滿タス能ワサルニ依リ、今回之ニ新版書籍大ニ増加シ其書目モ挙テ当新聞十一月一日発兌ノ附録ニ挿入シタレバ御観覽ヲ禱ル。

但シ十一月四日ヨリ八日マテ日延ナシノ五日間

明治十八年十一月 名古屋本町二丁目 石版舎

石版舎の書籍安売り広告はこれ以後愛知県紙には見られない。しかし、これ以後『伊勢新聞』に三度書籍安売り広告を掲載している。最初は明治十八年十一月十七・十八日の「書籍大安売広告」で「曩に当舎出張所を当地多門町に置き、専ら諸新聞雑誌を販売し来りたる処、着々歩を進めたるは諸君の御愛顧に依る次第なれば、其御鴻恩を報酬せん為め来十七日より廿三日まで一週間左の所へ臨時出張し、書籍の大安売を営み候間御来臨を禱る」として、津中之番町西側五番邸石版舎出張所における安売りを広告する。続いて十二月七日から十日、「四

日市に於て書籍大安売」と題して「従来左の所に名古屋石版舎出張所を置き、専ら諸新聞雑誌販売に従事せし処、大に諸君の信用を博したるを以て、今回同出張所に於ても名古屋本舎全様目下流行の書籍店を開業し、其祝悦として来る五日より九日まで五日間書籍非常の大安売を営み、亦粗景を進呈すれば陸続御来臨を俟つ」とするもので四日市南町石版舎出張所における安売りである。さらに明治十九年四月一日から七日に「書籍大安売広告」弊店エ名古屋本舎ヨリ出張致、来ル四月一日ヨリ同七日迄書籍大安売仕候間、昨年同様賑々敷御光来之程奉待入候敬白。／勢州津大門町／新聞雑誌新版書籍 大売捌所石版舎出張所」という広告を載せる。

岐阜の場合もそうであったが、石版舎は隣県に設置した新聞雑誌売捌のための支店や出張所を拠点として書籍安売りを展開している。出張販売は高山でも行われた。飛騨高山まちの博物館所蔵角竹郷土史料に引札が残る(Kr-2-43-429)。活版印刷両面摺一枚のもので、広告文は次のようになっている。

書籍大安売広告

近來書籍ノ競売処々ニ起リ、然ルニ其競売タルヤ、只書籍ノ外面体裁ノミヲ飾リ、活字ノ誤植又ハ丁数ノ脱漏シタル不完全ナルモノヲ買集メ、頗ル廉価ニ

販売シ、以テ購客ヲ釣ルノ狡猾手段者往々アリ。実ニ悪ムベキノ甚シト云フベシ。本社義ハ、従来諸国新聞ノ売捌、兼書籍販売ノ業ヲ営ミ居、幸ヒニ江湖購客ノ信用ヲ堅フセシニ付、右等狡猾者流ハ誓ツテ為サズ。今般数千ノ新版物ヲ仕入候ニ付、尚購客諸君ノ便理ヲ計ランカ為メ、当地ニ臨時出張所ヲ設ケ、本月十六日ヨ同廿二日迄向フ一週間、左ノ代価ヲ以テ大安売販売、景物トシテ書籍進呈仕候間、陸続購求アランコトヲ切ニ奉冀望候。謹告。

但日延等ハ決シテ不致候間、一日モ早ク御來臨ヲ乞フ。

十九年八月十四日

飛驒高山 名古屋 石版舎臨時出張所

これに続けて三段の書目を両面に掲げ、末に「此外書籍并ニ諸雜誌数千部有之候得共一々列記スルニ違マアラス。依テ大略ヲ記載仕候間看客諸君御來臨アツテ御購求アランコトヲ希フ／書籍大安売本家 飛驒高山 名古屋石版舎臨時出張所／住所之義ハ当地到着上報告仕候也」と結ぶ。これ以後石版舎の書籍安売りは広告等で確認できない。

さて、この地方で最も早く、また最も広域的で規模の大きい書籍安売りを石版舎が展開できたのはなぜだろう

か。どこからどのような有利な仕入れが可能であったのであろうか。

明治十四年（一八八二）八月九日『愛岐日報』に掲載した石版舎の広告「新版書目再度取寄販売」は、肩書きに「石版図画印刷／諸新聞売捌」とあって、まだ書籍流通に乗り出したばかりのころのものである。ここに主として東京で出版された四十八点の書目が列記されているが、このうち二十六点が兔屋の出版物である。『台所規則』等薄い冊子の手軽な兔屋本が好調な時期であったにしても突出している。確言はできないが、名古屋支店を構える前においては、兔屋本の名古屋流通を支える拠点として石版舎は機能していたのではないか。明治十七年中に名古屋支店を閉めた後も、石版舎の仕入れ先として兔屋は機能したのかもしれない。

明治十八年二月五日『東海新聞』に、鶴声社と石版舎連名で、鶴声社版の稗史小説七点の売捌広告が載る。石版社は同様に、同年六月二日同紙には九春堂版、六月十一日には春陽堂版の売捌広告を石版舎は掲載する。明治十九年三月十九日『扶桑新報』には鶴声社版^重『眞書太閤記』の予約申込所として石版舎の広告が載る。また栄泉社今古実録シリーズ、『月雪花恋路の踏分 前編』、『狂詩文歌句幼学便覧』(明治十六年、春陽堂版)、『昔語質屋庫』(同年、著作館版)、『墨田川梅柳新書』(同年、鶴声社

版)、『絵本忠義水滸伝』(明治十七年、武田平治版)、『絵本朝鮮軍記』(明治十八年、嵯峨野増太郎版)等多数の東京書肆発行書に売捌書肆として石版舎の名が載る。石版舎は東京書肆の名古屋流通拠点として重要な位置付けになつていたものと思われる。また、『廣明治天一坊』は明治十六年の石版舎版であるが、その売捌所として、春陽堂・兎屋誠・秩山堂・鶴声社・静霞堂・巖々堂・万字堂・續文社・共同社の東京書肆の名が並ぶ。また岡島支店・兎屋支店・大悦堂の大阪書肆、駸々堂・太田権七の京都書肆の名も並ぶ。

つまり、愛知県内のみならず、近県にまで広く新聞雑誌、また書籍の流通網を保持していた石版舎は、東京はじめ都市部の書肆の中部地方流通拠点として重要な役割を果たしており、緊密な協力関係を構築していたものと思われるのである。無慾堂の安売り予告広告にぶつけて、それを阻止するような充実した安売りを展開できたのも、この関係による有利な仕入れができたからであつたらう。兎屋と無慾堂との関係を考えれば、この石版舎最初の安売りの背後に兎屋の影を見ることも可能であろう。商品とノウハウの提供があつたものと勘ぐれなくもない。全国各地で兎屋や鶴声社は各地方紙に安売り広告を出したり出張販売を展開していったりするが、両者とも愛知県ではこれを行っていないのは石版舎との関係を重視して

いたからであろう。つまり鶴声社も兎屋同様、石版舎の安売り商品の提供に関わっていたのではなからうか。(鈴木)

東雲堂

東雲堂は、一連の書籍安売りをもってこの業界に参入してきたと思われる新興の書店である。東雲堂は、明治十八年十一月五日から二十一年八月一日まで、長期にわたって愛知県紙に多くの安売り広告を掲載している。十八年十一月五日『黄金新聞』『東海新聞』『名古屋絵入新聞』掲載広告は次のようになっている。

世界無双書籍之大安売廣告

来ル十一月五日ヨリ七日迄三日間非常奮発原価ニ拘ラス正札ヲ以テ一万三千余種ノ書籍ヲ大安売仕候間、他店安売廣告ト御見比べノ上統々御購求ノ程奉願候也

○但シ余リ安売ニ付景物ハ無ク候。

名古屋本町五丁目書林 東雲堂

続いて、十九年一月二十二日『黄金新聞』に「新版書籍安売」として書目付きの広告、三月二十五日から四月二日まで『金城新報』『扶桑新報』に「書籍大安売本家

東雲堂」として「日本に競べなき書籍大安売」広告、五月五日『絵入黄金新聞』『扶桑新報』に「それ又出た競争書籍すてきに大安売」広告、明治二十年一月十一日『絵入扶桑新報』に「常時大安売の書林」をうたうて書目付きの広告を、二月十九・二十日同紙に「大奮発大競争書籍大安売(二十年第二回)」、三月二十四日同紙に「天下震動書籍無双之競売書目追加」広告を掲載している。兎屋に比べると上手いとは言えないものの、他の安売り業者と同様の派手な惹句をもって広告している。また、二十年十月二十九日から津で出張販売を行うに際し、同日より十一月一日までの『伊勢新聞』に次の広告を掲載している。

書籍大安売 本月二十九日ヨリ十一月四日マデ
今回ハ一大世ノ安売、其上景物ハ沢山呈進ス。書目録ハ呈上仕候間、御読ノ上成程コレハ安イト思召ナレバ、ドヤ〜御尊来ヲ乞。ヒヤ〜喝采。

名古屋書籍問屋 東雲堂
津宿屋町拾番地
出張売捌所 柏屋健次郎方

これ以外に東雲堂の出張販売広告は今のところ見当たらないが、先述した石版舎の出張販売に倣ったものなの

であろう。二十一年三月十四日『愛知絵入新聞』に『政治之骨』等五本の書籍を「新版発行書籍問屋安売書林」として広告しているが、売捌として豊橋の春風舎の名を併記している。春風舎遊佐発については後述するが、東雲堂同様、新聞販売で石版舎との繋がり濃く、ちょうどこの頃書籍安売りも始めている。東雲堂の安売り広告で最後に確認できるのは、七月三十一日・八月一日に『名古屋』に掲載した次の広告である。

書籍非常大割引

勉強ト安売トヲ以テ一世ヲ風靡セシヨリ東雲堂ノ名忽チ江湖ニ顕レ、爾来益々諸君ノ愛顧ニ逢ヒ、日に駸々繁盛ノ域ニ進歩ス。今回其祝意ヲ表シ、併せて愛顧諸君ニ御礼ノ為メ飽迄御便利ヲ計リ、茲ニ七月三十日ヨリ八月十五日迄大安売ヲ以テ売出シ仕間、品切ナラサル内ニ陸統御注文奉願候。日限後二割ヲ加へ候付、左様御承引アラントラ。尤書目代価表呈上ス。

○御注文ノ節ハ必ラス前金ニ限ル。郵券代用ハ一割増、運賃又ハ郵税ハ御自弁タル可シ。

(書目)

新版書籍問屋 発行書肆 東雲堂本舗
名古屋本町五丁目

東雲堂は、石版舎に次いで早期に書籍安売りを始めた名古屋書商であったが、競争的安売りの終焉まで継続していったところが特筆に値しよう。(原田)

美濃屋文次郎

静観堂美濃屋文次郎の安売りは明治十九年五月五日『絵入黄金新聞』掲載の広告から始まる。

静観堂書籍大安売の広告

天地間に活動闊游候万物の靈たる御客様方、益御多福愈御機嫌能被為在芽出度奉慶賀候。諸弊舗静観堂の日に増し商売繁昌に相成候儀は偏に御客様の御愛顧の厚きに由る故に、右御礼の為め名をつけて茲に大安売の大挙を企て、本月五日より廿五日まで三週間御披露可仕候。然れども弊舗は尋常の安売書店と異にして彼の景物に三割或は五割方の書籍を差上等のごまかし主義に非ず候間、景物ト云あしらひノかやくは決して用ひず、純然粹然たる潔白安売に御座候○稗史小説昨今相場回復の萌有之候に付、世間の各書林は追々直上け仕候得共、弊舗は仮令倒れて後已むとも決して直上げは不仕候のみならず、却て今度は一層目立て直下仕候間、左の代価表を篤ト御

覽可被下候○今日此安売を挙行仕るに付ては、既に三月上旬より用意仕居候。又之が為めに先月上京して新出版物其他種々取揃へ、元仕入の掛合には余程骨折申候。夫故如此安価にて売上可申候。而して茲に一言御注意迄に申上候事は、目録の中にも飛切りの品は尤沢山持合せ有之候得共、忽ち売切れ可申候間、御油断無く片時も早く御購求可被下候。

遠方の御方代金郵便為換にて御通送可被下候又運賃諸費は総て御自弁。

日限中は毎に店先き群聚可仕候間御懐中物は呉々も堅く御用心にて御光来可被下候。

書目代価表は弊舗に有之候間御入用の御方には無代価にて呈上す。

静観堂 名古屋本町筋十一丁目 美濃屋文治郎

美濃屋文次郎は、東雲堂と異なり、江戸時代中期から営業を確認できる歴史の長い老舗で、明治以降もこの地域の書籍流通の一角を担っていた。そのような店にして、安売り競争の波に乗り出さざるをえない時代状況であったわけである。この広告で注目されるのは「先月上京して新出版物其他種々取揃へ、元仕入の掛合には余程骨折申候」とあるところで、自ら東京に向いて仕入れの交渉を行い今回の安売りに臨んだということであろう。明

治二十年九月七日『金城たより』にも「小生儀一昨五日東京ヨリ帰着仕候此旨辱知諸君ニ告ク／九月七日 静観堂 三輪文次郎」という広告もあって、石版舎などの動きに遅れず安売りを展開していくためにかなりの仕入れの努力を行っている節がある。なお、五月二十五日から三十日、『絵入扶桑新報』に一回、『絵入黄金新聞』に四回、安売りを二週間日延べする旨の広告を掲載しているが、これも安売りの常道であろう。

次いで十一月五日『絵入扶桑新報』に、十二月十日まで五週間の安売りをを行う旨の「静観堂書籍大安売の広告」、二十年一月一日『扶桑新報』に「静観堂初売広告」を掲載し、二月六日『絵入扶桑新報』に書目追加の広告が見られる。その後七カ月間広告は見られず、九月二十日『金城たより附録』、二十二日『愛知絵入新聞』に「明治二十年秋季静観堂大売出し」と題する広告が見られる。二十一年一月一日『金城たより』に初売り広告を掲載し、二月十五日同紙に書目追加の広告を載せこれが最後の安売り広告となる。

名古屋では、他に本町五丁目衛寿堂の書籍安売り広告（明治十九年七月二十四・二十五日『扶桑新報』、二十五日二十八日『絵入黄金新聞』掲載「書籍類開店并大安売広告」）、「書籍大安売大隊長」を称し、二十年一月五日『扶桑新報』『絵入扶桑新報』に「メチャ／＼ダラ／＼大

安売御披露」広告を掲載した本町通七丁目の百架堂があるが、いずれも営業の具体的ところはよく分からない。（原田）

三星堂と春風舎

三河地方については、豊橋の三星堂と春風舎、また西尾の三省堂の安売り広告を確認できる。

三星堂中川弥吉は、明治十八年七月二十一日『東海新聞』に「広告／＼和漢洋書籍○筆墨紙類○大蔵省印刷局御製造品類○学校用諸器械○同好社員毎月書画会 会費三錢申受小華先生ヲ始メ諸大家ノ展観ヲ進呈ス○諸新聞雜誌物価表電信各地ノ相場○東海新聞無送送料特別大安売 右開業以来日増ニ御用被仰付難有奉鳴謝候就テハ猶一層廉価ヲ以テ御用ニ可応候間不相變御愛顧御引立ノ程偏ニ奉願上候也／＼豊橋呉服町旧大手前 三星堂敬白」という広告があり、その営業の概要が分かる。書籍・文房具のほか新聞の売捌も行っているのが注目される。これに先だって掲載された七月十五日の『東海新聞』広告では、淡月堂（後述）とともに岡崎・豊橋および近隣地域の配達を行う旨をうたっており、三河地方の新聞流通の大きな一角を担っていることが分かる。同年十二月十六・十七日『東海新聞』の広告は三星堂の唯一の書籍安売り広告である。

新版書籍学校用諸器械筆墨大安売

右ハ十二月十六日ヨリ廿日マテ五日間、弊堂ニ於大安売仕候。特ニ名古屋石版舎ヨリモ出張仕候間、賑々敷御光来之程伏テ奉希上候。

但拾錢已上御買上ノ御方へハ景物差上可申、且遠方之御方ニテ広告入用ノ諸君ハ郵券二錢御投与アラハ速ニ差上升。

新聞雜誌書籍売捌 三州豊橋呉服町 三星堂

「名古屋石版舎ヨリモ出張仕候間」とあるのが注目される。後に詳述するが、明治十九年に石版舎が立ち上げた聯合新聞売捌会社の豊橋分店として、三星堂は石版舎が供給する諸新聞の流通に深く関わることになるが、明治十八年の時点においても、石版舎とはこれと同様の関係であったと思われる。安売りに供する書籍類も、当然石版舎が供給したものであったはずである。

春風舎遊佐発も三星堂同様、新聞販売を行っていた店である。石版舎との関係が深く、やはり聯合新聞売捌会社の豊橋支店として営業していく。その春風舎は明治二十一年二月八日『愛知絵入新聞』に、

稗史小説洋籍類ノ無類飛切大安売ダ

●買人のお喜び売人の涙非常のお勉めを●するのが
此時節に●第一だで買玉へ。いやならおよしましよ
●新奇で面白く品が上等

二月十二日ヨリ全廿七日マデ

稗史小説洋籍類ノ無類飛切大安売ダ

皆さんの御飛いきで新聞雜誌は申すに及ばず、日増繁昌致し舛ので御礼の爲め、勉めて安売だから是非々々買ひに来てお呉れま正。

豊橋本町 春風舎

という広告を載せる。これが最初の安売り広告で、同紙と『扶桑新聞』に二月十八日まで確認できる。ただし『扶桑新聞』掲載のものは「二月十二日ヨリ同廿七日マテ」稗史小説洋籍ノ無類飛切大安売ダ／うそなら試めしに来てどん／＼買てお呉れま正／豊橋本町 春風舎」という小さい広告となる。

同年十一月十五・十六日『新愛知』に、

夫レ社会ノ進歩スルヤ満般ノ事物亦タ新陳代謝セザル可ラス

何んかんと理屈より實際か肝心要めの世の中にて、

十一月十六日ヨリ三十日迄大見切にて在来の書籍は悉皆一束三文で売却し、新刻書籍と仕替をせんと思

ひ得意の勉強は兎屋跣足で退去とやり込め、天下無敵の螺らなし実地で大見切大安売は御客の買ひ時、吾舎の便利。メチャく安売ドシく買ふべく。

勉強大將軍 豊橋本町 春風舎

という広告を載せる。これが最後に確認できる春風舎の安売り広告である。書籍安売りを始めたタイミングを見ても、石版舎からの書籍供給があつての挙と見なすことが可能であろう。なお、広告文中「兎屋跣足で退去とやり込め」とあつて、兎屋支店撤退後の愛知県紙に兎屋の広告は見られないものの、大阪紙や東京紙上の兎屋の派手な広告は引き合いに出すのがごく自然なくらい浸透していたものと思われる。

また、明治二十年一月二十五・二十六日『絵入扶桑新報』に「●稗史小説／●和漢洋書籍／本月廿四日ヨリ売初二週間実地大安売粗景呈上仕候間賑々敷御光来之程奉希上候／西尾横町黒部鹿島屋 三省堂」という広告を載せた三省堂は黒野友次郎で、明治十七年『尾三農商工繁昌記』(續立社)に「書籍類 横町 三省堂友治郎」とあり、後述する淡月堂の出版物の売弘に名前を確認できる。安売り広告はこれだけである。(原田)

二、新聞雑誌流通網と書籍流通網

これまで見てきたように、愛知県を中心とした地域における書籍安売りについては、新聞・雑誌の流通を行っている業者が深く関わっていることが大きな特色といえよう。

石版舎の場合

先に述べたように、石版舎はこの地域で最初に書籍安売りを始めたが、安売り用の書籍をふんだんに調達できたのは、それなりの卸価格で提供する書店があつたからである。石版舎は、提携関係を維持していくべき存在として彼らが強く意識していたからであろう。そしてそれは一重に石版舎のこの地方における流通力の強さにあつたと思われる。

雑誌類はもろろんのこと、刊記末の売弘書肆として多くの書籍に石版舎の名を見る。栄泉社・九春社・著作館・春陽堂・鶴声社・有隣堂・菱花堂・東京稗史出版社等々。『東海新聞』はじめ愛知県紙にはこれらの版元の出版物の広告を当地大売捌の石版舎が頻繁に出しており、東京の業者にとってこの地方の書籍流通に欠かせぬ存在として石版舎が定位置していたことが理解できる。

石版舎は明治十二年に印刷業をもって事業を開始した。

『名古屋印刷史』(一九四〇年十二月、名古屋印刷同業組合)に開業の引札が紹介されている。翌明治十三年十一月二十六日『愛知絵入新聞』刊記には「売捌所／尾張名古屋門前町七ツ寺角 滑稽社／同本町二丁目 石版舎／同西春日井郡清水町 藤倉屋わかる」とあって、創業の翌年には業務を拡張し新聞雑誌販売に乗り出す。『尾三農商工繁昌記』(明治十七年、續立社)の書籍商之部に「新聞雑誌訳書類／石版 銅版 製造 弘売所 本町石版社」という広告が載る。書籍商の部立てであるが、印刷業が一方の柱であったし、書籍業としても新聞雑誌がその営業の主たるところであった。

明治十七年一月六日『名古屋絵入新聞』掲載の広告には、書籍営業も行い、九丁目に支店を設置していることがうかがえる。

石版舎販売書籍目録出版広告

弊舎営業追々繁昌仕、発売ノ書物日ニ相高ミ、店頭陳列ノ余地無キ勢ニ立至リ候ハ、畢竟世上看客ノ御愛顧ニヨリ候儀ト深ク感謝ノ至リニ御座候。就而者例年ノ通り書目代価表出版仕候間、嘗テ諸新聞紙等月極ノ御看客ハ勿論配達可仕候得共、其他御望ノ諸彦ヘハ弊舎ニテ進呈可仕候間、御瀏覽之上尚一層ノ御購求ヲ冀望ス。

但シ遠隔ノ御方ハ郵便切手二銭封入被成下候得ハ早速御通送可申上候。

石版銅版彫刻印刷 名古屋本町二丁目 石版舎
油画製造和洋製本 全九丁目広小路上ル全支店敬白

明治十七年六月二十二日『名古屋絵入新聞』広告「東京各新聞直下広告」にも本町通広小路上ルに第一支店、七間町三丁目に第二支店を設置したことをうたい、「新聞代価附并書籍目録印刷仕候間、御入用之諸君へハ本支店ニ而差上可申、且遠方之諸君ハ郵便切手式錢御送り被下候ハ、差上可申候也」としている。支店が新聞のみならず書籍の流通拠点としても機能していることがうかがえる。

同年十二月十一日『読売新聞』掲載の広告(同様の趣旨のものは九日『名古屋絵入新聞』にも掲載)は、「弊舎儀、従来各新聞売捌仕居候処日増盛大相成候付、過般三菱会社及共同運輸会社と特別約定取結、毎日四日市出帆ノ汽船便を以て運送致、名古屋市中ハ三日目早朝より配達仕候間、当市中ハ勿論最寄接近之看客陸續御購求あらんことを伏て乞ふ」として、末に「●新版書籍 ●政治 ●法律 ●翻訳 ●小説定価を幾許之割引仕候」とある。東京紙が当地でも有力な広告媒体として機能していること、つまり東京紙の発行部数が当地においても少なくないこ

とを示しているが、流通量の増大に伴って整備されてきた新聞流通網に、雑誌はもちろん、「新版書籍」も流れてくるのである。

また五月三十日『時事新報』の時事新報社広告からは「岐阜小原町」に石版舎支舎を設置していることがうかがえる。さらに十月十日『東海新聞』には次のような広告が掲載されている。

報知新聞無遞送料広告

今回報知新聞社ト特約ヲ結び本月十六日ヨリ左之ヶ所無遞送料則一ヶ月金八拾三錢ニテ配達仕候間旧ニ倍御愛観奉希上候

○名古屋市街及ヒ熱田○起○一之宮○布袋野○稲置ニ至ル沿道各村

右配達所 名古屋本町二丁目 石版舎

○名古屋ヨリ岡崎ニ至ル○崎岡ヨリ○西尾及拳母ニ至ル沿道各村

右配達所 岡崎上伝馬 淡月堂

○岡崎ヨリ豊橋ニ至ル沿道各村

右配達所 豊橋呉服町 三星堂

○名古屋ノ知多郡半田及ビ亀崎ニ至ル沿道各村

右配達所 知多郡半田 小栗太郎兵衛

報知新聞特別売捌所 名古屋本町二丁目 石版舎

岡崎の淡月堂、豊橋の三星堂、半田の小栗太郎兵衛と組んで、三河地域まで網羅する流通網を形成していつているわけであるが、これは『報知新聞』のみに関わることではない。すでに六月二十九日『時事新報』の「無遞送料広告」からは淡月堂との提携が見られる。さらに、十二月には聯合新聞売捌会社を設立し、大阪紙の大売捌所であった芝垣仙次郎と組んで、より多くの種類の新聞を広範な地域に流通させていく。十二月三十日『時事新報』掲載広告を掲げてみる。

各新聞大売捌広告

今回聯合新聞売捌会社ヲ設立シ、東京大坂ヲ初メ各地ノ新聞卸売仕候間、各地ニテ売捌御依託相成度新紙ハ、見本ニ割引書御添御廻シ相成度、又弊社接近之濃州江州越前加賀等ノ諸域ニテ売捌御望ノ御方ハ、名古屋ヨリ急便ヲ以差立、郵便ニ先シ候様遞送仕候間、当会社ニ御照会被下候ハ、割引ヲ初メ運送ノ□御報答可申上候也。

愛知県尾張国名古屋本町二丁目

明治十八年十二月 聯合新聞売捌会社

発起人 石版舎主 近藤寿太郎

朝日新聞日本絵入新聞大売捌所 芝垣仙次郎

これに先だつて十二月二十五日『東海新聞』所掲の広告「各新聞売捌広告」にも「今回聯合新聞売捌会社ヲ設立シ、共同印刷会社ト特約ヲ結ヒ、同社ヨリ発信スル扶桑新報及ビ絵入扶桑新報ノ一手売捌仕、従来東海新聞愛知日報名古屋絵入新聞ノ看客ハ勿論、石版舎及ヒ柴垣仙次郎ヨリ配達仕来リ候諸新聞ハ一切聯合新聞売捌会社ニテ強壯ナル配達人数十名ヲ置キ迅速配仕達可候間、何新聞ニ不限旧倍ノ御愛顧アラシコトヲ伏テ乞フ」として翌十九年一月一日開業であることを告げている。

次は明治十九年二月二十三日『扶桑新報』広告である。

当社儀、左之各地ニ支店分店及ヒ代理店ヲ置キ、扶桑新報、絵入扶桑新報之一手売捌仕、東京大坂各新聞雑誌モ併テ販売仕候間、四方之諸君模寄ニ就テ陸續御購求アラシコトヲ伏テ乞フ。

名古屋本町二丁目 聯合新聞売捌会社

岡崎伝馬町二丁目 全 岡崎支店

豊橋呉服町 全 豊橋支店

半田本町十一丁目二月廿三日開業 全 半田支店

津島二月廿五日開業 全 津島代理店

一ノ宮三月一日開業 全 一ノ宮代理店

○知立分店柴田儀右衛門 ○西尾分店 川嶋富士郎

○矢作分店 三浦栄次郎 ○福岡分店 筒井新八

○挙母分店 吉田桑吉 ○大野売捌 青木佐七

既存の販売店も「分店」として傘下に置き、流通網の一層の充実をはかっていることがわかる。岡崎支店は淡月堂、豊橋支店は三星堂であろう。六月には柴垣仙次郎と袂を分かつことになるが、八月一日『絵入扶桑新報』・同日『扶桑新報』掲載「分店設置広告」には緒川分店・常滑分社・横須賀分社・内海分社の設置を広告し、さらに拡張・網羅を続けていることがわかる。同年六月石版舎刊『千代の春嚶聞書』刊記末売捌所一覽記事に次に掲げる。

大売捌所

岐阜笹土居町 石版舎支店

知多郡半田 石版舎出張所

勢州津大門町 全出張所

岡崎中伝馬 聯合新聞売捌会社 岡崎支店

豊橋上伝馬 錡々舎

東京橋町四丁目 鶴声社

全神田淡路町 巖々堂

全南伝馬町 春陽堂

名古屋本町五丁目 東雲堂

大坂備後町四丁目 岡島支店

売捌所

名古屋玉屋町 永樂屋東四郎

全本町三丁目 美濃屋代助

全大曾根坂下 松屋平兵衛

全鉄砲町 慶雲堂

全 美濃屋文次郎

全玉屋町 永樂屋吉三郎

全 扇屋由蔵

全下園町 田島屋由蔵

全本町四丁目 菱屋藤兵衛

全本町二丁目 風月堂

全 玉泉堂

勢州津京口町 郁文堂

勢州桑名殿町 北勢舎書店

全四日市南町 伊藤善太郎

岡崎両町 木村繁蔵

津島片町 聯合新聞売捌会社 代理店

三州知立 全分店

全挙母 全分店

全西尾 全分店

全福岡 全分店

全矢作 全分店

全御油 全分店

全新城 全分店

全豊川 全分店

三州蒲郡村 安藤富助

知多郡半田 小栗太郎兵衛

全亀崎 耕芳園

全大野 本屋新蔵

丹羽郡稻置 伊藤千代次郎

勢州桑名三崎通 石版舎出張所

熱田神戸 竹葉堂

名古屋門前町 吉良屋兼助

全 秋田屋俊助

全江川町 皓月堂

全門前町 石版舎分店

大売捌所から検討してみる。豊橋錚々舎は明治二十年まで聯合新聞売捌会社の豊橋支店であったところで、こままでの五店は石版舎にはぼ直接連なる新聞流通の動脈である。鶴声社・春陽堂は、稗史出版大手で該書の取扱に相応しいとともに、石版舎の仕入れに欠かせぬ存在であり、相互に依存し合う関係であつたろう。巖々堂もしかり、巖々堂出版物の愛知県売弘として石版舎の広告はよく見るところである。そもそも巖々堂は東京における

新聞雑誌取扱の最有力店でもあった。東雲堂も石版舎に続いて書籍安売りを展開し、明治二十一年までそれを継続していったことは先に触れたところであるが、新聞売捌も行っていた。最後の岡島支店は言うまでもなく、関西随一の新聞店である。

売捌所については、新聞販売に関わっていることが確認できない店は次のとおりである。永楽屋東四郎・美濃屋代助・慶雲堂・美濃屋文次郎・永楽屋吉三郎・扇屋由蔵・田島屋由蔵・菱屋藤兵衛・風月堂・玉泉堂・北勢舎書店・安藤富助・本屋新蔵・伊藤千代次郎・竹葉堂・吉良屋兼助・秋田屋俊助・皓月堂。そもそも当地における書籍流通の重要な一角であった書店がほとんどである。それ以外は分店も含めて石版舎の新聞流通網に連なる者たちで半数近くを占めている。つまり、石版舎の出版物の流通は、当地はとくに、新聞流通に関わる提携店に多くを依存していたことになる。そして、石版舎が仕入れた書籍の流通も同様であったものと思われる。(鈴木)

三河地方の場合

豊橋の三星堂と春風舎が書籍安売りを行っていたことは先に紹介した。この両店は後述する淡月堂とともに三河地域における『東海新聞』流通の大動脈であった。東京紙については、明治十八年九月十六日『朝野新聞』所

掲三星堂「無通送料広告」に「曩に名古屋石版舎と本社と特約を結び」とあり、また十月十日『東海新聞』所掲石版舎「報知新聞無通送料広告」に三河地方の配達所として淡月堂とともに名を連ねている。三星堂の書籍安売りにについても石版舎の後ろ盾があったであろうこと、先述したとおりである。春風舎は、開店がやや遅れ、明治二十年一月、聯合新聞売捌会社の豊橋支店として出発したのと思われる。その後『愛知絵入新聞』や『新愛知』の三河地方売捌の筆頭となっていくが、これも石版舎の後ろ盾があったのものであろう。明治二十一年二月から始まる書籍安売りの三星堂同様、石版舎からの書籍供給があったと想像される。

岡崎の淡月堂については書籍安売広告を確認できないが、書籍と新聞・雑誌両輪で手広く営業していたことを確認できる。『東海新聞』の売捌所に石版舎とともに名を連ねているほか、明治十八年六月二十三日『東海新聞』に石版舎・石版舎岐阜支店とともに『朝野新聞』『絵入朝野新聞』の無通送料広告、同七月十五日同紙には豊橋の三星堂とともに同紙の無通送料広告、七月三十一日同紙には石版舎・三星堂とともに『時事新報』無通送料広告を出している。また、七月二十一日同紙には知立に代理店設置の広告を出し、九月二十三日同紙には「弊店配達線路新設ノ広告」として額田郡・宝飯郡を手

広く配達範囲としたことを広告している。つまり、石版舎や三星堂など同業と協調しながら、三河地域における新聞・雑誌の流通を手堅く押さえていたのである。

一方、自著も含めて出版書も多く、たとえば明治十七年刊『古物商取締条例傍訓』の刊記は次のごとし。

明治十七年三月十一日御届 (定価金六錢)

明治十七年三月卅一日出版

編輯兼出版人 愛知県平民 相馬政徳

三河国額田郡伝馬町乙三百十八番邸居住

発兌 三河岡崎伝馬町上ノ切 書籍諸新聞雑誌売

捌所 淡月堂

大売捌 名古屋本町 石版舎

全 岡崎連尺町 環翠堂

この後に「各地売捌所」として県内四十一軒の店名が並べられていて、新聞流通を手堅く押さえる一方で、地域の書店と密な関係を保ちつつ書籍の流通力を維持していったものと思われる。(鈴木)

おわりに

『大日本帝国 内務省第三回統計報告』(明治二十二年三月、総務局報告課)によれば、明治十六年の新聞・雑

誌の発行部数は五千七百二十七万八千二百二部であったが、明治二十年には九千五百九十三万三千八百五十四部に至る。愛知県紙の場合、先述したように、創刊・廃刊めまぐるしく、集計した数字の評価が難しい。物価・相場関係の新聞を除く日刊紙のみを『愛知県統計書』を用いて比較してみる。明治十六年は『東海新聞』『愛知日報』の二紙のみ。前者は二十七万八千九百九十六部、後者は十五万五千九百九十部、合わせて四十二万八千七百八十六部。明治二十年は、『名古屋絵入新聞』が四十七万一千二百四十三部、『扶桑新報』が四万五千五百五十四部、『金城新報』が三万二千四百十部、『絵入扶桑新報』が四十万八千四百一十一部、『金城たより』が百十三万一千七十七部、『扶桑新聞』が八十三万四千六百六十五部、『扶桑絵入新聞』が四十九万三千五百六十一部、『愛知絵入新聞』が四十七万一千二百四十三部、合わせて四百五十七万八千八百七十七部となる。東京紙や大阪紙の流通状況も関係してくるので、単純に県内紙の総計のみを比較しても状況を把握しきれものではないが、愛知県においてもこの明治十年代後半における新聞流通の伸長がめざましいものであることは間違いないだろう。

新聞は広告媒体としてもこの間に威力を増したわけで、派手な広告で書籍安売りを展開した兎屋の商法はこの流れにうまく乗ったものであった。また、東京紙・大阪紙

の全国的流通は、輸送インフラの整備に伴って速やかな流通の大動脈を形成していくし、地域隔々にまで広がる需用は毛細血管のような細やかな流通を形成していく。新聞・雑誌流通のターミナルとなるような地域の店は大きな流通力を保持するようになる。

折しも実録物、稗史小説翻刻物の流行期であった。これらの読み物は絵草紙屋に馴染む商品であり、もともと新聞・雑誌は絵草紙屋の流通に依存していた。かくして新聞・雑誌の流通網は稗史小説類の主要な流通網となり、その取扱は次第に小説類にとどまらなくなっていく。つまり、既存の書籍流通網に加えて、またそれに食い込むように新たな書籍流通が形成されていくのである。そもそも書籍を扱っていた店が新聞販売も手掛けるようになる場合も少なくないが、新聞販売から起業して書籍店に営業を拡張する店が多くなり、業界の様相は大いに变化していったのであった。仙台の佐藤屋勘右衛門、宇都宮の手塚祐次郎、長崎の安中与兵衛など、いずれも新聞販売を行っていた店であるが、彼らが稗史小説類を主たる商品とした書籍安売りから書籍業を手広く手掛けていくのも自然なことであった。

そして、石版舎とそれに連なる新聞・雑誌流通に携わる店が安売りを展開していったこの地域の様相は、その典型的な図式の一つであると思われるのである。(鈴木)

注

(1) 鈴木俊幸・恵良友貴・友成毅・金子美樹・大石明香里『山梨日日新聞』『甲陽日報』所掲書籍安売広告をめぐって『中央大学国文』六二号、二〇一九年三月、鈴木俊幸・友成毅・金子美樹・大石明香里・國分美奈穂・増田凜々・湯沢友実『静岡大務新聞』所掲書籍安売広告をめぐって『中央大学国文』六三号、二〇二〇年三月、鈴木俊幸・國分美奈穂・湯沢友実・原田和佳・乙部桃子・小野澤美優・畑中彩花『共同研究』大阪の書籍安売業者について考える『中央大学国文』六五号、二〇二二年三月等。

(2) 鈴木俊幸『近世読者とそのゆくえ』二〇一七年、平凡社。

(3) 鈴木俊幸「兔屋の書籍出張販売」(中央大学文学部『紀要 言語・文学・文化』一二九号、二〇二二年二月)。

(4) 明治十九年六月十日『黄金新聞』広告「公告/本年一月柴垣仙次郎ト同盟シ本社ヲ創立シタル処爾来右柴崎仙次郎ノ後見人神戸源左衛門ナル者ノ行為ニ付今回断然分離致候就テハ以後神戸源左衛門儀当社ニ関係無之依テ此段公告ス/明治十九年六月九日 名古屋本町 聯合新聞売捌会社」。

(5) 淡月堂については浦部幹資「三河岡崎の民権家相馬政徳と書肆淡月堂」(中部図書館情報学会機関誌編集委員会 編『中部図書館情報学会誌』五九号、二〇一九年三

月)に詳しい。

(すずき としゆき／本学教授、
はらだ わか／商学部四年)